

—目 次—

- 1 決意の日 002
- 2 食えない遊び人 017
- 3 思わぬ再会 029
- 4 交渉の余地 056
- 5 一夜の交わり 078
- 6 飛び入り参加 097
- 7 出たところ勝負 116

※この作品はフィクションです。

実在の人物や団体などとは関係ありません。

1 決意の日

「ヴォルフラム。待て……ッ」

不慣れな片言かたことが後ろからついてくる。

従者、ルーベンの声だ。

ここではめったに見かけることのない浅黒い肌がフードをかぶった頭からわずかに覗いている。

その奥には黒曜石の如くぎらついた瞳が隠されている。

片言であってもヴォルフラムには彼の言いたいことは分かっている。

長い付き合いだ。

奴隷だった彼を幼い頃、恩赦と称して解放してから。

名前も与え、暮らしていくための戸籍さえ用意したのに、彼は決して離れようとしなかった。

従者となって恩を返すといつて聞かない。

彼を奴隸から解放したのは正しかったのか、時々考えてしまう。

私は、彼を『買った』んじゃないのか？ 奴隸を売り買いする連中と何も変わらない、下賤で浅ましく卑劣な人間じゃないかと——そう思ってしまう。

おのれの卑屈な考えを切り捨てるように鋭く舌打ちを叩いて、大通りを歩く。道行く人々の声はどれも不安に揺れていた。

「今度の総督閣下はどんな方になるんだ？」

「女好きで夜会好きだよ。到着してすぐ就任式を開くんだとさ」

「嫌だわ。また税が上がるのかしら？」

「なんで反乱軍の奴ら、前の総督を殺しちまったんだ。これじゃあもつと酷くなる」

「昔の帝国を取り戻したいんだろ。誰が上でも変わらねえのに」

一言ひと言が胸に突き刺さった。

——前総督はかつて帝国の首都として名を馳せた皇都レクトルをたった三年で、陰鬱な都市へと変貌させた。

城門からまっすぐ続く大通りからは活気が消え、脇道のいたるところに孤児や浮浪者が徘徊している。

時には飢えたまま死んだ老人の遺体が道の片隅に放置されていることもある。

去年は雨に恵まれず、小麦の値段が大幅に上がり、不平不満はいたるところで聞こえている。

それでもあの男は税率を上げた。人々が子どもたちのために残していたわずかな食糧すら奪い、自分のものとした。

なにもかも限界だった。

このままではヴォルフラムが皇都を取り戻す前に、人々が疲弊してしまう。だから暗殺を決行した。

およそ先帝の遺児が行う振る舞いではない。暗殺など後ろ暗い人間のやることだ。やり口が卑怯この上ない。

卑怯な振る舞いに人はついてこない。例え効果が絶大であったとしても——
誉れ高き帝国の男児ならば、臣下になんと言われようと、正々堂々と奴を総督の地位から引きずり下ろすべきだった。

例え、敵に滅ぼしたはずの国の血統が生きていると知られても——
(唯一の救いは、私が手を汚したることか)

あそこで部下に暗殺を命じるような人間であったなら、反乱軍の盟主からも早晩引きずり下ろされていただろう。

胆力のない者に人はついてこない。

しかし人々の反応から見てそれも良かったかどうか……

逆に反感を招いている気配さえあった。

(なら一体どうすれば良かったというのだ！)

父ならばきつと死ぬまで戦うと言いつつ続けただろう。敵の降伏勧告にもめげず、弱な臣下たちを叱り飛ばし、皇都を守り抜こうとしただろう。

最期まで戦場で戦い抜いた最後の皇帝。

それがヴォルフラムの父だ。

今でも目をつむれば父の最期が思い浮かぶ。血の塊かたまりを喉に押し込めながら、苦しさと怒りを隠した顔で、固く手を握られた。

『お前に後事を託す。良いな。奴らを必ず我が領土から駆逐せよ』

それは呪いのように刻まれ、今もヴォルフラムの体で息づいている。

できることなら皇太子という地位も権威もかなぐり捨てて、逃げたかった。

けれど自分の前に次から次へと人が現れて、父の最期の言葉を補強し、塗り固めていくのだ。

重税にあえぐ民を見過ごせるか？

——いいや。

先帝を害した者には罰がくだされるべきだ。

——ああ、そうだともし。

帝国の栄華を我らの手にもう一度！

声高に繰り返される言葉にヴォルフラムの逃げ場はどんどんなくなっていく。

今日だってそうだ。

たった今まで寂れた酒場で、父の旧臣たちと会議を開いていた。

議題は新総督をどうするか。

また暗殺するのか、あるいは脅迫のネタをつかみ、脅迫することで徐々に奴の力

を殺いでいくのか。だが暗殺を経験した敵が我々の接近を許すのか？

ヴォルフラム自身は暗殺ではなく対話を求めている。

もし新総督が話の分かる男ならば、ある程度まで妥協してもいい。

みな毎日を生き抜くことこそが重要なのだ。支配者は誰だって構わない。

ヴォルフラムがもう一度見たいものは、活気あふれる皇都の姿だった。人々が笑いあい、幸せに暮らす光景だ。

それが見られるならば、何を犠牲にしても良かった。

しかし旧臣たちは違った。

彼らは総督暗殺の絶大な効果に酔っていた。酩酊していたとさえ言っている。

皇都の中腹に建てられた総督府は今も混乱の極みにある。敵が共和国の首府に助力をあおいでいる今こそ好機だ。

総督府を乗っ取り、連中を追い出すべきだ！　そして皇太子殿下の即位を宣言なされるべきです！

そう言つてはばからない。

今週にも到着する新総督を暗殺すれば、連中だつてこの皇都が一筋縄ではいかな場所だと思ひ知るだろう。

だがヴォルフラムは前総督の暗殺で敵がどれほど高度な技術力を持った国か、理

解していた。

帝国だった頃は父しか持つ事が許されなかった魔道具の数々、その多くを下っ端の兵士たちが利用していること。さらに彼らの多くは読み書きができる。

肌が違うものたちが一緒に見張りに立ち、雑談しあう姿には羨望を覚えた。

ルーベンを奴隷から解放した時、自分が本当に得たかったものがそこにはあった。だが彼らを指揮し、束ねる総督は下衆の極みだった。

醜悪な豚と言っても良い。

暗殺に向かった夜も、悲鳴を上げて嫌がる少女の身体にのしかかっていた。まだ成人もしていない、ヴォルフラムから見れば幼子だ。そんな少女の細い身体をベッドに押し倒し、逆らえばどうなるかしきりに言い聞かせ、か細い悲鳴をせつつ。そのくせ部屋には美しい調度品や金銀財貨が積み上げられていた。あれほどおぞましい部屋を見たことはなかった。

今でも奴を殺した時の感触が指先から離れない。

指先にかかる首の皮の厚み、事切れる瞬間に聞こえた小さな息づかい。

相手は権力を嵩に着て人々に重税を押しつけ、か弱い少女を弄んだ卑劣漢だ。権力者の風上にも置けない屑だった。

しかし戦場で人を殺すのとは違う——平時に人の命をつみとる行為は、ヴォルフラムの良心を苛んだ。

(あれをもう一度やれというのか……?)

それならばいつそ新しい総督に託してしまいたい——
そう思ってしまうほど、本日の会合は実りのないものだった。

総督が立て続けに殺されれば、連中もここが一筋縄ではいかぬ場所と思い知るだろうと旧臣たちは言う。

帝国が見くびられることもなくなる。

皇都で暮らす民も皇太子殿下の素晴らしさに気づくだろう。

全てがうまく行く。

そう言つて憚らなかつた。

しかし敵も馬鹿ではない。

総督が次々と暗殺されれば、次は武力行使と称して、最新鋭の武器に軍人を率いてくるだろう。

今度こそ皇都を完膚なきまでに叩きのめし、皇都で暮らす人々を殲滅する可能性だつてある。

そんなことになれば父の遺言を守ることは愚か、国家の礎である民すら守れなくなる。

そんなのはごめんだ。

「っ」

己の頭に浮かんだ最悪な予想を打ち消すように、ヴォルフラムは脇道へと入つた。かつて綺麗な石畳だった道は補修する職人も逃げて、ところどころ欠けていた。隅にはうずくまつたまま動く気配のない老人がハエにたかられている。

これが皇都レクトルの現状だ。

「良かった。捕まえた」

ぬっと伸びた黒い手に手首を掴まれる。

ルーベンはくろぐろとした瞳に安堵の光を浮かべていた。こちらを気遣う気配がフードをかぶった巨体からにじみ出ている。

「心配し、ました」

帝国人にしてはヴォルフラムも背の高い方だが、ルーベンは頭ひとつ大きい。

不慣れた敬語に悪戦苦闘する姿はいつだってヴォルフラムの心を和ませてくれる。

「すまない。私も気が立っていた」

すなおに謝ると、ルーベンがにっこりとほほ笑んだ。

「奴ら、ヴォルフラムにばかり嫌な仕事、押し付ける。意地汚い灰狗だ」
ハイイヌ

「それはお前の国の言葉か？」

こくりと巨体を揺らして頷く姿は、同い年なのにどこか幼く見える。

「草原に残った死肉、食い漁る。何も考えない、浅ましい獣だ」

ルーベンの故郷は北の山脈を超えた先にある。

一面草原に囲まれ、草をはむ山羊や牛の面倒を見て暮らす人々が住むという。

日が落ちれば、銀砂をばらまいたように美しく荘厳な星空が現れると聞く。

温めた山羊の乳酒をのんびりと飲みながら、満天の夜空を愛でる。

その風習にヴォルフラムは幼い頃からずっと惹かれていた。

今の皇都ではあまりに贅沢でのどかで遠い文化だ。

「二度、見てみたいな。お前の故郷……」

叶うべくもない望みが口から滑りてた。

死肉を喰らう灰狗も、どこまでも続く蒼天と深い緑の草原が重なり合う姿、そし

て「」の卑小さを忘れさせてくれる美貌の星空。隣にはルーベンがいる。

頭に思いうかべるだけで美しく尊い光景だった。

そこへ頭上から声が降ってくる。

「——なら俺と行く。俺ならヴォルフラム、困らせたりしない。二人で旅をする。そしたら、きつと辿りつく」

はつとして顔を上げると、ルーベンの瞳は本気だった。

厚い唇を一文字に引き締め、太い眉を眉間にぐつと引き寄せている。短く刈り上げた灰色の髪がフードから現れて、両肩を掴まれた。

その提案はあまりに魅力的だった。

魅力的すぎた。

できることならそうしたい。

だが本当にそれで良いのか？ とヴォルフラムの理性が訊き返してくる。

それはもうこの世にはいない父の顔であり、母の顔であり、弟たちの顔で尋ねてくるのだ。

足元が太いツタに絡まったかのごとく、重たくて動かせない。

死者たちの重みに足を取られる。

復讐をとなえる死者たちの情念と呪いが身体のなかで溶け合って、一歩も動けない。

(分かっている。私にはやり遂げなくてはならない仕事がある。皇族として生を受けたからには、果たすべき義務がある)

ルーベンの視線を受けとめきつてから、ヴォルフラムは顔を俯けた。

「——ああ。今回の件が片付いたらお前と二人、故郷を目指すのも悪くない」
ぱっとルーベンの表情が明るくなった。その顔は心の底から私の言葉を信じているようだった。

(すまない……)

できることならルーベンとともに壮大な夜空を愛でる旅に出たい。皇太子という身分も捨て、ひとりの友人として彼の故郷で静かに暮らす。

そんな生活を送れたらどんなに良かったらう。

だがまぶたの裏に焼きついた光景がそれを阻む。

父や母の遺志に報いるため、皇都に残された唯一の皇族として、ケリをつけなければ――

新総督と会って話す。

それがどれだけ危険で難しいことか、一度暗殺を実行した身にはよく分かっていた。

たとえ失敗しても構わない。

そうすれば恩赦で『買った』ルーベンを今度こそ従者という役目から自由にしてやれる。

そのくらいの報酬は許されていいはずだ。

二人旅を期待して喜ぶルーベンに抱きしめられながら、ヴォルフラムは己の未来を冷静に観察していた。

2 食えない遊び人

共和国の首府にほど近い会員制の高級プールにその男はいた。

「元首閣下の国攻めに付き合つて五年、俺はもう充分働いたと思わないか？ トバ

ゴ」

浴槽の向こうで仁王立ちする副官にリチャードは言った。

両脇に美女を侍らせての発言である。

見る人間が見れば、眉をひそめる状況であつたがリチャードは意にも介さない。

仕えてくれて五年経つ副官のトバゴは、その眉間に深い皺を刻んだまま、上司をつめたく見下ろしてくる。

「いいえ全くこれっぽっちも」

「五年だぞ五年。最後に残った帝国なんぞ、皇帝が国の総力を結集して、死にもぐるいで突撃してきた。あんな奴らと五年も知恵比べさせられたらな。こうやって綺麗なお姉ちゃんを侍らして、遊びたくもなるだろう?」

「尊重すべき理由が一切見えてきません。リチャード將軍閣下」

機械人形かと思えるほどの断言ぶりである。

「馬車馬のごとくこき使われた俺にはまだまだ休息が必要だ。そう思うだろう?」
「帝国を併呑して三年、ただ飯食らいの軍人にはもう充分な休息をとられたのでは?」

逆に問い返されて、リチャードはげんなりとした。

この問答かれこれ三年続いている。

両脇の美女たちは勝手知ったるなんとやらで聞き流している。何も言わなくとも空のグラスに酒を注いでくれるのだから、実に優秀だ。

天井からは南国特有の暖かい陽光がガラス張りの窓から降り注ぎ、昼間から酒を

あおる人間を明るく照らし出してくれる。

プールのあちこちに熱と湿気に強い植物が植えられていて、リゾート地のような
雰囲気醸し出していた。

「脳漿が飛び散るほど頭を使わされたんだ。あと二年は休まなきゃ俺の脳は元に戻らない」

「共和国始まって以来の常勝將軍とはとても思えぬ発言をどうも」

「お前の小言も嫌味ったらしさが日に日にうなぎ登りになって良かったじゃないか」

「小官が仕えているのは、向かうところ敵なしだった將軍閣下であって、女遊びに耽^{ふけ}るしか能のないヒモ同然の遊び人ではありません。それに本日は元首閣下より直接言伝を預かっております」

トバゴの最後のひと言に、リチャードはつぶれたカエルのような悲鳴を上げた。

「ご婦人方にはお引取りを」

女たちは心得たようにプールから次々と上がっていく。

真昼のプールが数分で静まり返った。唯一聞こえるのは、近くの石像から浴槽へと注がれる水音だけだった。

リチャードは短い休息の終わりを嘆くように、吹き抜けの天井に向かって盛大な舌打ちを叩く。

「じじいが何の用だ？」

「我が国の元首閣下をそのように呼ばれるのはどうかと思いますが、まあいいでしょう。先ほど閣下が仰った帝国攻めの後、その都レクトルに我が共和国の総督が遣わされていたことはご存知でしょう」

「そんなこともあったな」

湿った髭を手でしぼりながら、適当に相づちをうつ。

「その総督が二週間前、暗殺されました」

トバゴのひと言でリチャードは顔を上げた。

その唇にふてぶてしい笑みが浮かぶ。

「着任していたのは、首府の治安維持を任されていた武官だったな。アレを殺したのか？」

リチャードの記憶では、金にがめついが剣の扱いは優秀だった男だ。蹂躪まもない敵地で簡単に殺されるほどヤワな人間ではない。

「複数か？」

あの巨漢を殺すのは簡単ではない。殺すなら三人は必要だ。しかしトバゴの言葉は予想とかけ離れていた。

「一人との事です」

「へえ！ そりゃ凄い」

快哉を上げると、トバゴがじろりと睨んできたが関係ない。

死ねばみな灰だ。

死者が生者を縛ることはできない。どれだけ悪く言おうが、喧嘩を売れるのも生きてゐる内だ。

「調べたところ、暗殺された理由は不正に税率を引き上げ、自らの懐を潤していたからと聞いています。監査官の調べで事実と判明しました。元首閣下はこの暗殺を憂慮し、次の総督にあなたをご指名です」

「俺は内政に向かん。じじいだって分かつてるだろう」

「閣下の常勝將軍としての名声を利用したいのでは？」

「そんなことは分かっている。俺は戦に勝ちすぎたからな……」

ゆっくりと酒の酔いを冷ますために首を振り、リチャードは考え始めた。

共和国が生まれて以来、二元首閣下として君臨するじじい殿が安易な人事を組んだことは一度としてない。

一あれば五の利益を求める老獐ろうかいな男だ。

もし新総督として就任した俺が死ねば帝国民全てを奴隷階級に落とせる。

そうなれば労働力の補充が行えるし、かつて帝国に虐げられた歴史を持つ国の人々はいい気味と思うだろう。さらにここ最近の軍部の専横を良く思わない官僚たちの溜飲も下げられる。いいことづくめだ。

逆に俺がかつて一大交易都市として栄えたレクトルを発展に導けば、本国にとって大きなうまみとなる。

交易品の増大、有能な人材の選出、さらにその人材を首府に送り込めばあの人材蒐集が趣味のじじい殿のことだ。大いに喜ぶに違いない。

税もかなり潤うだろう。

冷静に自分の生き死にの結果を考察したあと、リチャードはトバゴに尋ねた。

「で、奴を殺した犯人は分かっているのか？」

「帝国の残党で反乱軍の盟主本人の手によるものという噂があります。それと遺体のそばにこれが……」

トバゴが軍服の懐から取り出した紙切れには、短い文章が添えられていた。だがリチャードの意識を捉えたのは、文章ではなくその筆致だった。

帝国に勝つまでのあいだ、嫌になるほど良く眺めた書体とそれは驚くほど似ていた。

帝国皇帝が送ってきた檄文とそっくりだ。当時、帝国の文化に通じる人間に訊いたところ、この書体は皇族以外使うことを許されていないと言う。

ならこの文を書いたのは誰なのか——？

じわじわと身体に血が通い始める。

——レクトルの総督を殺したのは、先帝の遺児だ。

流麗で高貴な筆致は、その辺の貴族が書ける代物ではない。文章に匂い立つような気品があった。

「抵抗組織の連中が良く書く文章ですよ」

「この紙切れはじじい殿も見たか？」

「はい。それを見て、閣下に総督を任せるよう命じたそうです」となる。元首閣下も送り主が誰か気づいている。

(あのじじいに先を越されたくないな……)

人材蒐集に激しい情熱を燃やす老人だ。

もしも送り主が優秀と分かれば容赦なくリチャードから取り上げるだろう。

そういう男だ、この共和国を一代で大陸最強の国家に築いた元首閣下は――

「……他に伝言は？」

「芽を摘むかどくは閣下に任せると」

使えるのなら生かせ、使えなければ殺せという意味だ。

見極めてこいという事か。

暗殺を自らやってのけるほど優秀な遺児はたった一人しかいない。

(確かそう、名前は……ヴォルフラム)

リチャードは一度だけ対峙したことがある。

あれは敗走する帝国軍に追撃を仕掛けた時だ。

功に焦った味方が敵の尻に食いつきすぎて、殿の騎士に一刀のもと斬り伏せられた。

こちらが射かけた弓は全ていなされ、その完全無欠ぶりにリチャードの武人としての火がついた。

気づけば将でありながら、最前線に躍り出て彼と斬り結んでいた。

最後の一振りで彼の兜を切り上げると、男とは思えぬほど美しい顔が陽の光に照らしたされ、見惚れたのを覚えている。

帝国人は見目麗しい者が多いが、そのなかでも彼の美貌は群を抜いていた。

後にも先にも抱かせて欲しいと懇願したくなる人間は彼だけだ。

土下座したって構わない。彼の肌にもふれられるのならば。

けれど先の戦いの最中、彼は戦死した。遺体が見つかることはなく、そのまま自堕落な生活を送っていたらこの辞令だ。

向かうしかない。

リチャードはプールから上がった。

「着任予定日はいつだ？」

「来月の上旬までには向かえと」

「遅すぎる。一週間早めろ」

トバゴの顔に喜色が宿る。

「では仕事に？」

「元首閣下じきじきの命令だ。それにあっちでイイ女を見つけるのも悪くないだろ」

「女漁りをするより仕事をしてください」

副官の小言を適当に聞き流しながら、リチャードはプールの脇に用意されていたタオルで身体をぬぐった。

その頭は待ちに待った機会到来にフル回転している。

彼を捕まえるには万全の準備を整えていかなければ。新総督として申し分のない

餌を撒いて、それから……。

アイデアがどんどん浮かんでくる。

リチャードは嬉しさを隠せず、久しぶりの再会を待ち焦がれた。

3 思わぬ再会

まず、ヴォルフラムが事を進めるには情報が足りなかった。

新総督を暗殺し、その足でルーベンの故郷に向かう。

そのためには総督府の最新情報が必要だった。新総督の外見や名前、さらには就任式での新総督の行動ルート、接触するのにちょうどいい場所はどこか。

押さえておくべき情報は山ほどある。

幸い、一部の旧臣たちはよく働いてくれた。

もしかしたら自分の手を染めずにいられることに安堵しているのかもしれない。

(いずれにせよ私がやるべきことは一つだ)

反乱軍のアジトは皇都レクトルの寂れた酒場きびだった。店主は皇都から去り、もは

や店としての機能はなくなっている。二階の比較的大きな個室がヴォルフラムの執務室だった。

朝日が差しこむなか、ヴォルフラムは総督府の見取り図を机に広げた。

古びてあちこち傷がついた執務机はとても皇族が使う代物ではない。

しかしこの程度のことではいちいち目くじらを立てるのはもうやめた。

これくらいで減る品位なら己もその程度の人間ということだ。

ヴォルフラムは見取り図をまるで絹布を扱うかの如く、丁寧に四隅を整えた。

その所作一つで脇に立つルーベンの目を奪うとも知らずに。

「殿下、奴の日程が掴めましたぞ」

ノックもなく入室してきたのは父からヴォルフラムを預かったと自称してはばからない、貴族のメルビルだった。

じろりとルーベンがメルビルの行動に眉をひそめたが、彼は帝国人でもないルーベンのひと睨みなど完全に無視していた。

同じヒトとは思っていないのだ。

「その呼び方はやめよと何度も言っているが？　メルビル卿」

「おお、私としたことが、すみません。しかし私が呼ばねば誰が殿下をそう呼ぶのです。貴き人々とつとは他人に身分を呼ばねば、いつか自分が何者か忘れてしまます。これは重要なことですぞ」

一言えば十帰ってくる。

とにかく弁のたつ男だ。そこに助けられたことはほぼ無い。とかく喋りすぎるのだ。

先だつて前総督の暗殺も決行前に情報が一部漏れていた。

ヴォルフラムはその原因がこの男にある気がしてならない。

それでも臣下は臣下だ。

(まず私が信用せねば……。そうですね、父上)

今はどうもない父が生きていたらどれほど心強かったことか。

しかし父はもういない。

血のあぶくを吹きながら戦場で死んだのだ。

「分かった。それで奴の日程とは？」

「こちらです！ ああ、しかしこの暗殺が成功した暁にはぜひ私めを宰相の位に：

…！ 宜しいですか。殿下」

抜け目ない男だ。

何度もこうやって確認してくる。これが今の栄達の近道とでも言うかのように。

「成功すれば、な」

もう何度注意したか分からない。

だが牽制けんせいは必要だ。

国の内政を皇帝とともに支える宰相には膨大な知識と柔軟にそれを使いこなす冷

徹さが必要だ。

口が上手いだけの男では到底国はまわらない。

手渡された紙片^{メモ}には三日後、新総督が就任式に出席すると書いてあった。

(この式なら潜入もたやすい、か……)

「いかがですか？ 殿下。就任式ともなれば今このレクトルで我がもの顔で要職に就いている者たちが参加される。暗殺成功の暁にはきつと皇太子殿下の良いお披露目にもなりますよ。さらに連中も肝を大いに冷やすことでしょう！」

「……そうだな」

ヴォルフラムはメルビルほど樂觀的ではなかった。

それにお披露目などやる気もない。

考えていた内容は逆だ。

(まずは新総督がどんな男か探る。もしも前総督を殺した時の『置き土産』が奴ら

に届いていれば、今度はまともな人間を送り込んでくるはずだ。民のことをよく考え、この皇都を再び栄えることができる人間を——)

見極め次第で新総督と交渉するつもりだ。

すでにこちらは前総督を殺している。

命には命であがなう覚悟があつてこそ、対等な交渉ができるというものだ。

そこでもしも新総督が甘い男なら、自分が生き残る可能性も見えてくる。

(だがこれは夢想だな……)

ふつとヴォルフラムは唇をゆるめた。

できることなら生きてままルーベンの故郷をとみに見たいと思つているが、多く

は望めそうにない。

過ぎた欲は身を滅ぼす。

自分が殺した前総督と同じ轍^{てつ}を踏む気はなかった。

「では潜入の案を練るとしよう。詳細は決まり次第追って伝える。それまで皆には待てと伝えよ」

「ははあ！」

慇懃いんぎんな礼を残し、メルビルは悠然と去っていった。

暗殺を実行するのは彼ではない。それゆえ足取りにも楽観がにじみ出ていた。

扉がしっかりと閉まったのを確認してから、部屋の隅に控えていたルーベンを手招きした。

「俺に手伝えること、ある、か？ ヴォルフラム」

ヴォルフラムは柔和な笑みを浮かべて、ルーベンの浅黒い頬を優しく撫でた。

くろぐろとした目がどぎまぎして揺れ動く。その様子を眺めるのが、ヴォルフラムのいまや唯一の楽しみだった。

「ああ。就任式に集まる連中も気づけないとおきの潜入方法がある」

ヴォルフラムは自分の容姿が母譲りの女顔であることを自覚していた。

幼い頃は女の子に間違われた事が何度もある。

それゆえに体を鍛えたが、骨のつくりが小さいせいか、どうしてもルーベンのような戦士として屈強な体には恵まれなかった。

今では男らしさを強調する服を選ぶことが多い。

そこを逆手に取るのだ。

長年、女顔と呼ばれてきた自分が絶対に選ぶことのない選択肢——すなわち女装である。

(女の姿なら、男だという新総督にも近づきやすい)

この際、皇族としてのプライドなど捨てよう。

もしも生き残れたら、どうせ捨てるものだ。

葛藤する時間すら惜しい。

「必ずお前の元に帰ってくるからな」

たとえどんな姿になろうとも、それだけは決して違たがえない。
真実の誓いを口にして微笑むと、ルーベンが顔を赤らめた。



敗戦後、皇都レクトルに建設された総督府はヴォルフラムから見れば何もかもが異質な建物だった。

例えば外壁。

下品な赤に塗りたくられ、白き都と誉れ高い皇都を穢す一点のシミのようだ。

例えば建物の形。

玉ねぎを頭にのせたような不思議な屋根は、直線を尊ぶレクトルで浮いていた。

彼らの国では、玉ねぎ型の屋根は祈祷で灯すロウソクの火を模したもので神聖な

形らしい。

しかし白亜の城郭を破壊して建てられた姿は異質で禍々しい存在だった。だが総督府には、皇都全域を支配する力がある。

神聖ダリア共和国。

華麗な大輪の赤い花、ダリアを国花とする国だ。

飽くなき人材活用と技術開発によって、大陸の七割を併呑してきた大国。

その勢いは凄まじく、今だつて総督府の屋上には最新鋭の飛空艇が停まっている。なんでも共和国の元首から新総督がじきじきに貸し与えられたらしい。

（本国から信頼が厚いものが来たということは、私の土産はちゃんと渡ったということか）

今夜の就任式に向かう客たちにまぎれて、ヴォルフラムは如才なく館の内部を観察していた。

みな新総督に近づこうと目をぎらつかせている。

一部の男の目はヴォルフラムの身体にも注がれていたが、中身が男と知れば幻滅して去っていくだろう。

変装は完璧だった。

銀髪を結び上げ、ルビーをあしらった髪留めで仕上げていた。

目元と口元には薄く紅を引き、耳には古風な真珠の耳飾りをつけている。

服は背中がぱっくりと開いた藍色のドレスだ。

男だと見破られぬよう、喉仏には大振りな宝石が縫い付けられた絹のリボン巻いて隠している。袖も肩のあたりでふくらむデザインにしており、肩幅の広さから男とバレることはない。

(念のため変声魔術もかけたから、男と思われる可能性はない)

ドレスを脱がされない限りは。

太ももには革ベルトを巻いて、短剣を身につけている。

その刃はどんなに硬い宝石でも断ち切る鉱石——アダマントでできている。

人間の首など造作もない。

「いやあ、新総督の就任式などごとく大層な式を開くもんだから、来るのは欲にまみれた老人ばかりと思っていたが、こんな美人が来るとは知らなかった」

突然の言葉とともに男の手が腰にまとわりついた。

ヴォルフラムが反応する隙すらない。

武術を極めた自信がそれなりにあっただけに、ぞわりとした。

(何だこいつは……)

背は少し高い。深みのある茶髪を後ろでひとつに束ねている。

くせっ毛なのか、一纏めにした髪は四方八方に跳ねている。顎髭を生やしている

せいで、年齢が分からない。

首元や手首のシワで人の年齢は見分けがつくと聞いたが、首は立襟たてえりで隠され、男の手元は白い手袋で隠されている。

あと分かるものと言えば目元くらいだった。

クセのある物言いは若さゆえかと思つたが、男の目は老獪な貴族を思わせるものがあった。

(私より年上……か?)

ヴォルフラムは今年二十九になる。男の容姿から見るに三十路は過ぎているだろう。

年上ならば無碍にはできない。

古来より帝国では老人は知識の宝庫と呼ばれ、大切にされてきた。

有事の際には彼らの知識を役立てて乗り切ってきたからだ。

それは少し年上の者が相手であつても変わりない。

礼を失さぬよう丁寧な言葉遣いで声をかける。

「あの、失礼ですが手を離して頂きたい」

「なぜ？」

逆に問いかけられるとは思ってもみななかった。そのため反応が遅れる。

「恋人もいないのなら、俺が今宵リードしても構わんだろう？」

暗に左手の薬指に何もはめていないことを揶揄されたが、ヴォルフラムの脳裏にはルーベンの姿が浮かんでいた。

「私にもちゃんと相手は……います」

幼い頃から主従の間柄だったけれど、二人きりの時は友人のように振舞った。なにより今回の任務が無事終われば、彼と二人で静かな余生を送れる。

それは結婚と同じように素晴らしいことに思えた。

(もしも生き残れたら、ルーベンと揃いの指輪を作ってもいいかもしれない)

不格好な粘土でも草花でもなんでもいい。

ただ彼と同じものを分け合いたかった。

そんな夢想を髭面の男が断ち切った。

「だが指輪を身につけてはいない仲だ。なら俺にも少しはチャンスがあるんじゃないか？」

するりと腰に回された手が脇腹をなでようとしてくる。

ヴォルフラムは容赦なく叩き落とした。

「猶予があると宣言なさりたいなら、まずはご自身の名を名乗ってはどうですか？」
ピシヤリと言いつければ男の目が子どものようにきらきらと光った。

先ほどの老獺ぶりは嘘のように消え失せていた。

「ああ、そうだな！俺はリチャード。リチャードと言う。あなたの名は？」
急に改まって名を問われると妙に気はずかしい。

照れを隠すように、小さな声で答えた。

「ツ……………ヴォルフリーダだ」

まったく別の名前に変えてしまうと偽名を呼ばれたとき反応が遅れる。そのためほんの少し変えるだけに留めた。

「ヴォルフリーダーか……いい名だ。ヴォルフとお呼びしても？」

その呼び名は幼い頃、まだ発音に慣れないルーベンに呼ばれた愛称だ。

成人した今ではめったに呼ばれることがなくなったせいか、改まって言われると妙に心臓がうるさい。

「……断る！」

「そう言わずに。今夜一晩だけだ。ヴォルフ」

耳元で愛称を囁かれただけで、身体がびくりと反応してしまう。

（これから大仕事が待っていると言うのに……！）

そもそも新総督の顔すらいまだ拝めていないのだ。

旧臣たちが仕入れてくれた情報でも新総督の年齢や容姿までは掴めなかった。

就任式でその姿を確認し、彼と二人きりになるチャンスを手に入れなくてはならない。その為にはこのリチャードという男は邪魔だ。

武術を極めた自分でもとっさの反応が遅れたのだ。簡単に撒くことはできないだ

ろう。

(いっそ日を改めるべきか?)

思い悩んでいるうちに総督府の長い回廊を抜け、就任式が執り行われるホールへと着いた。

毒々しい赤い外壁とは裏腹に、ホールは二層吹き抜けの開放感あふれる間取りだった。純白の壁に掛けられたランプが淡い光をたたえている。

天井の中央にある天窓からは細い月光が降り注いでいた。今宵は満月だ。

白く儂い光はホール中央の床を小さく照らしていたが、客の入室を確認すると波のように揺らいで宙へ浮き上がった。

天井に等間隔で吊るされたつぼみ型ランプを包み込む。植物のツタを思わせる吊り糸に月光が収束した。

次の瞬間、つぼみが花開いた。

薄暗かったホールがあつという間に月の光を取り込んで壮麗に照らし出される。

「あ……」

これにはヴォルフラムも驚いた。

他の客たちも歓声を上げて、この美しい開花の一幕を堪能する。

壇上には新総督が座る豪華な椅子がひとつ置かれていた。

会場にはいくつもテーブルが並び、色とりどりの豪華な食事がすでに並んでいた。

立食形式のパーティーが共和国では主流だという。

新総督もそれに倣なったのだろう。

「どうだ？ 驚いただろう」

リチャードが自分の手柄のように語るのがなんだか面白くてクスリと笑ってしまった。

「そうだな。見事な満開ぶりだ」

褒め称えると、リチャードは親に褒められた子どものように嬉しがる。

だがそれも数秒の間だった。彼は居並ぶ客たちに振り返った。顎髭を指でしごきながら、ふてぶてしい笑みを浮かべる。

「今宵、我が就任式にお越し頂いた方々には、心より感謝とねぎらいを表す。そして我が元首閣下より皆さまへ言付けを一つ賜たまわっております。前総督の作り出した膿うみにたかる蠅はえは駆除せよと——。この晴れやかな場にお越し頂いた方々がそのような蠅ではないこと、新総督として切に願う所存です」

リチャードのひと言は、美しい花のランプに浮き立つ客の心に一瞬で冷水を浴びせる所業だった。

要するに前総督との間に築いた蜜月の時は終わりだと宣言したのだ。

客のなかにはすでに血の気が失せている者もいた。

今にも屋敷に戻りたい者はいるだろうが、新総督の就任式でそんな無礼は許されない。

もはや蜜月を過ごした者にとっては、針のむしろ同然であった。

（この男が新総督？ まさか私のことをもう知って——）
思わぬ出会いに脈が早まる。

しかしリチャードは無邪気に料理を勧めてくる。

「ほら。ヴォルフはどれが好きだ。やはり果実酒か？ これなんぞは遠方から取り寄せた蜂蜜酒だぞ。甘くて女にも飲みやすい。それとも男のように豪気な酒が好みか？」

（一体なにを考えている。この男……）

前総督を暗殺した時、唯一残した置き土産が脳裏をよぎる。

それは一通の書簡だった。

今までに反乱軍側で綿密に調べあげた前総督の悪行、またそれに関わったものたちのリストだ。

最後にこうひと言つけ加えた。

《併呑するならば、能ある者を送れ》

皇都を治めるに足りない者を今後も送りつけてくるのであれば、我々が奪回する。言うなれば宣戦布告であった。

そして送られてきたのが、このリチャードである。

見れば今このホールで血の気を失っている者たちは皆あのリストに書かれていた者たちだ。

恐らく一網打尽にするため招待したのだろう。

ここまで念入りな男なら、なぜ私に声をかけた。

(変装は完璧だったはずだ。正体はバレていないはず)

居心地の悪さは最高潮だった。

(前総督を暗殺したのは私だ。それを知って先手を打ってきたのか?)

分からない。

この男の意図が皆目見当もつかない。

二人きりで話せば、少しは彼の意図も掴めるのかもしれないが、式が始まったばかりの状況で簡単に抜け出せるとは思えなかった。

(どうする……)

悩んでいるうちにリチャードに手を引かれて、壇上近くに導かれていた。

「その、リチャード……総督。私には過ぎた場所です——」

「なぜ？ たかだか数段の段差だ。それに俺はヴォルフに見せたいものがある」

「見せたいもの？」

紺色のドレスの裾をなんとか捌さばきながら壇上までの数段を登りきると、新総督が座るはずの椅子に座らせられて、ぞわりとした。

(私がもう皇太子だと分かっているとでも言うのか?)

玉座には最高級の柔らかいクッションが置かれ、座りごこちはすばらしかった。しかし隣に立つ男のせいで、まったく安心できない。

気分が安らぐとは程遠い。

「さて本日集まっていた皆さまにはもう一つ、我が共和国から伝えることがある。俺は元首閣下から新総督を任されたが、前の男のように、この街で暮らす人々の全てを収奪する気はない。小麦も、時間も、人権も——

ほんの少し力を借りることはあるだろう。だがその時には必ず対価を支払う。税についても同様だ。元首閣下に報告されていた額はこの都市にしては小さい。小さいすぎる。ゆえに俺は『誰か』が虚偽の申告を行っていたと思うのだ。どうだ？」
リチャードの言葉は居並ぶ客たちにゆっくりと浸透していった。

ワインを白い紙に垂らしたかのように客たちの顔が面白いほど変化していく。

いまだ虚勢を張るもの、笑みを浮かべるもの、怯えふるえるもの、色とりどりの反応が見て取れた。

「ここで断罪の裁判を行う気はない。我が共和国で広間とは客をもてなす場を意味する。諸君が己を客だと理解できているのなら問題ない。俺が客と思えぬ者の屋敷

には、今宵憲兵を向かわせた。遠からず、誰が虚偽の申告に加担していたか分かるだろう」

リチャードが唇を開くたび、一部の客たちの顔色が青白くなっていく。中には悲鳴を上げ、泡を吹くものまで出る始末だった。

不意に、リチャードの手がヴォルフラムの肩に置かれた。

「最後に一つ、俺からも決意を表明したい。この椅子に座るものは必ず共和国の間でなければいけないというルールはない。有能であれば例えそれがかつて我が国に負けた人間であつても構わない——と俺は考えている」

ホールに今夜一番大きなざわめきが走った。

「俺はこの椅子に座る人間は、この街で暮らす人々のことをよく考え、思いやり、時には罰することも厭いとわぬ果敢な人間であれば良いと思つている。老若男女すべて者にその機会は与えられる。もちろん出自も関係ない」

どくん、と今までにないほど心臓が激しく脈を打った。

これは畏じゃないか？　と思う疑念と、本当に能吏を送り込んできたんじゃないか？　という喜びがせめぎ合う。

この男ならば戦いに翻弄され、傷ついた人々の心を再び上向かせ、前に進めることができないのではないか。

そう思ってしまう。

けど、違っていたら？

きつとルーベんとともに逃げたことを死ぬまで後悔するだろう。

(まだまだ。……まだ見極めなくては……)

ギユツと指を握りしめると、リチャードの言葉が続いた。

「俺の決意を証だてするために、今宵出逢ったばかりのヴォルフをここに座らせた。能力次第では俺があなた方の腹心になってもいい。どうだ、面白いだろう」

リチャードが控えていた給仕を手招きして、グラスを二つとった。

白銀の上品な泡が浮かぶ美しい酒だった。グラスを持たされるとようやくリチャードの手が肩から離れていく。

会場に集まった人々の関心はもはやリチャード一人に注がれていた。

たった数分の演説で彼は人々の心をさらい、魅了し、新たな門出の到来を予感させている。

雄弁とはこういうことだ。

メルビルの恩着せがましい喋り方とは一線を画している。

リチャードがグラスを掲げた。

それに異を唱えるものはホールはどこにも見当たらなかった。

「白き都レクトルに栄えあれ！」

共和国に占領されて以来、共和国の人間は誰も皇都に敬意を払わなかった。

純白一色に染め上げられた皇都の美しさに見向きもしなかった。

だが新たにやってきたこの男は違う。

皇都レクトルの名前を今一度呼びたえ、その美称を高らかに宣言した。
リチャードの言葉に会場中の人々がおなじ言葉を掲げ、杯をあおる。

今この時をもって赤い総督府は白き都の血となって入り込んだ。

そう実感させられるひと時だった。

4 交渉の余地

決まった。

場所が場所なら握り拳を握っていただろう。それほど今回のできは良かった。総督府のホールに集まった客の反応は予想通りだったが、何よりも最高だと思ったのは、ヴォルフラムの目だ。

悠然と言葉を重ねる俺を見つめる瞳。吸い込まれるような碧眼の奥に、わずかな戸惑いと期待と敬慕がまじっていた。

その視線こそリチャードが今宵なんとしても手に入れたかったものだ。

そうして今夜、念願の獲物が見事かかった。

腰を抱く手に熱もこもるといふものだ。

「では俺の部屋で未来のレクトルについて話し合おうじゃないか。ヴォルフ」

積もる話は充分ある。

それにこの姿。

まさか女装してくるとは思わなかったから、一瞬彼の性別がどちらだったか分からなくなつた程だ。

けど喉元に変声魔術の痕跡を見つけてやはり『彼』で合っていた。

ぴんと伸びた背筋は美しく、ぱっくりと背中が開いたドレスの美しさをさらに引き立たせている。

他の男たちが彼とお近付きになろうとチラチラ見ているのが分かったから、先手必勝で腰を抱いた。

上目遣いで少々睨まれたが、それすら心地よかった。

総督の玉座に座らせた時の居心地の悪そうな顔も愛らしい。

そして今、申し訳なさそうに辞退する顔も。

「すみませんが、先約がありますので」

「俺と積もる話がたくさんあるというのにな？」

分かっていようで、分からない。

そのギリギリを言葉に乗せる戦いは実に面白い。

正体が分かっているなどと言ったら、彼はすぐに去ってしまうだろう。

「閣下とお会いしたのは、本日が初めてだと思いますが」

「俺には興味がない？」

腰を抱いていた手を太ももにまで下ろす。繊細なドレープの中に短剣が隠れていることを指の動きで伝えると身じろいだ。

「ッ」

今夜初めてヴォルフラムの顔に焦りが見えた。ひやりとしていることだろう。

「護身用だろうか？ 前総督は鋭い短剣で首をかき切られたと聞いているが、あんなものはただの噂だ。違うか？」

見る見るうちにヴォルフラムの表情に翳りが差す。

いま彼は自分を殺すべきかどうか悩んでいる。

リチャード自身、新総督として着任したからにはそれなりの結果を出すつもりだ。壇上からの言葉は嘘ではない。

兵を指揮した時も敗戦国の人間でも良い働きができるならどんどん登用した。それこそ年齢、性別、出身に関わらず。

俺が減ぼした国なのだから、癒しも希望も俺が与えるだけ与えてやるさ。

それが罪悪感から来る想いかはリチャード自身分からなかったが、着任したからには適当に済ますつもりは毛頭なかった。

「で、どうする?」

試すような言い方で問いかけると、彼は乗った。

「いいでしょう。あなたがそう仰るのなら」

「決まりだ」

彼が自分のものだと見せつけるように肩を抱き寄せて、残った客たちに軽く挨拶

をしてホールを出た。

廊下に出るとすぐヴォルフに肩の手を叩き落とされた。

「つれないなあ」

「私はあなたの隣で見せびらかされる宝石ではないっ」

「でも俺の部屋についてきてくれるんだろう？」

負けじと腰を抱き寄せる。

「それは……あなたが言ったからで……ッ……尻に手を回そうとするな。けがらわしい」

手の甲をギュッとつねられた。

これは痛い。

「なんだ、男にベタベタ触られるのは嫌いか？」

「今日初めて出逢った人間なら当然だ」

吸い込まれるような美しい碧眼をすがめて、ジトツと睨んでくる。

「そいつはどうか。前に俺は皇帝が指揮する軍を追撃した。敗走しかかった帝
国軍は殿しんがりに第一皇太子を置いていた。ちょうどあんたと同じ銀髪だった。何合か
斬り結んで、兜をはね上げたら、男とは思えぬほどとびきり美人だった」

ヴォルフが完全に押し黙る。

「噂じゃ戦死したと聞くんが、最近妙な情報が入ってな」

ようやくと自室の前に来て足が止まる。

ヴォルフを逃がさぬよう腰を抱いたまま扉を開く。魔術回路が作動して、応接間
に自動で明かりが灯った。

「前総督の遺体近くには一枚の走り書きが置かれていた。併呑するなら、能ある者
を送れ……抵抗組織なんかが良く書く文章だ」

ヴォルフの緊張がぐんぐん高まっていくのが分かる。

「問題は書かれた文字さ。あの書体は皇族にしか使うことが許されていない禁字だ

った。なんで知っているかって？ 皇帝直筆の檄文を何度か見たことがあったんでね」

ヴォルフをソファに座らせ、その両肩に手を置いた。

「で、思ったんだ。前総督を殺したのは、先帝の遺児ヴォルフラム・レクトルじゃないかってね。あんたの名前とよく似ているよな。ヴォルフ」

耳元で名前を囁くと、彼の肩が小刻みに揺れた。

(さて、ここからどう出る?)

彼の反応次第で今夜、白き都の行く末が決まる。

斬り合いになるか、はたまた命乞いか。

後者でないといいな。

そんなことになったら彼を征服する愉しみが半減してしまう。

俺が屈服させたいのはあの日、刃を切り結んだ男なのだ。自分の命惜しさにみっともなくすぎる男ではない。

「私は……」

そつとヴォルフラムが自分の太ももに手をやり、短剣を抜いた。刺してくるか。

身構えた瞬間、彼はあろうことか短剣を握ることなくテーブルに置いた。

「ひとつ、あなたと話がしたい。リチャード卿」

向かいのソファへ座れと目で指図される。

もう一度会いたかった思い人に指図されるといふのは、なんとも胸躍る展開だった。

意気揚々と座れば、短剣の握り柄が自分に向けられていることに気がついた。

（俺を優位に立てるつもりか？）

切っ先はヴォルフラムに向かっている。もし刃に毒が塗られていれば、傷を負うのは彼の方だ。

「確かに私の名は貴殿が申し上げた通りだ。帝国が滅んだ今となっては先帝の遺児

に何の価値もないが、皇都レクトルで反乱軍の盟主を引き受けている。私が今日ここへやってきたのは罪を告白するためだ」

ヴォルフラムは自らの出自を誇りもせず、淡々と言葉を連ねた。

「わざわざ女装してまで？」

からかうと、彼はムツと眉をひそめた。

「これは……：：：：でもしないと館に入れないと思ったからしたまでだ。断じて私の趣味ではない」

「^{けな}貶してるわけじゃないぜ？ よく似合ってる。ドレスも化粧もおっぱいの盛りっぷりもな。このままベッドへ直行したいほど似合ってる」

ちらりと応接間とつながっている寝室を顎でしゃくってみせると、ヴォルフラムはさっと身を硬くした。

「私は男に抱かれる趣味はない！」

「さっきまで俺の演説に聞き惚れてたのに？」

「ッ……………」

きつと彼は心のなかで、ああ言えばこう言う男だ！ と苛立っていることだろう。その苛立ちは隙を生じさせる。

戦も話し合いも根っこは同じだ。

優位を保ち続けた人間が勝つ。感情を見せるなどお芝居の一環だ。決して自らさ
らけ出すものではない。

(ま、罪の告白に来たって言うなら、戦う気はないんだろうが……………)

ソファに背中を預けながら、リラックスした体勢でヴォルフラムを見つめる。

「その短剣は前総督の暗殺で使った凶器だ。それがあればあなたは私を断罪でき、
今後レクトルは名実ともに共和国の都市として生まれ変わることができる」

「つまり何が言いたい……………」

腹の底がちりちりと疼うずいた。

なんだか自分の予想と異なる雲行きになりつつある。

「今後、貴殿が旧帝国人を採用していけば、私は反総督派の急先鋒に祭り上げられるだろう」

「今までコソコソ隠れていたのが、俺の台頭とともに日の目が当たると？」

「察しがよくて助かる」

クスリとほほえむ姿は女神のように美しい。

あの日出会ってから、欲しいと思っていた欲望がじわじわと染み出してくる。

俺のものにしたい。

もっと色んな顔を見たい。

笑顔に泣き顔、照れた顔すべて俺の腕のなかで見せて欲しい。

グズグズに煮え立った感情が冷静さを剥ぎ取っていく。

今夜きつと彼を手に入れられる。

彼がなんと言おうと、あの日手に入らなかつた屈辱と苦悶をこの部屋で晴らせるはずだ。

そう決意した瞬間、彼が唇をひらいた。

「だから今夜、私を殺してほしい」

「——あ……？」

こちらの反応に構わず、ヴォルフラムは言葉が続けた。

「非常時である戦場ではなく、平時に私は前総督を殺した。その命を奪つたからには、命であがなうのが筋というものだろうか？」

聞きたくない。

そんな話は全くもって聞きたくない。

「貴殿が総督就任と同時に私を殺せば、本国にも理由が立つ。私は皇太子として、いやひとりの人間として己の罪にむきあえる。これほど一挙両得なこともあるまい。

そうではないか？」

ヴォルフラムは自分が殺される恐怖など微塵みじんも見せず、淡々と言葉を連ねていく。どれもこれも真っ当な言葉でお美しい。良心ばかり鼻につく。

「嫌だと言ったら？」

一瞬、驚いて目を見開いたが、すぐに伏せて弱々しい笑みをたたえた。

「それは……とても困る」

「生き残る方が困るのか？」

「もし貴殿が生きろと言うのなら、みっともない希望に縋ってしまいそうだからな」
その瞳の奥で、かすかな揺らぎを感じた。

死への恐怖ではない。

叶えられなかった夢に手が届くもしれないという期待に揺れている。

それはきつと皇太子が望む氣有壮大なものではなく、些細ささこでごく小さな夢だ。

平民なら簡単に叶えられるような。

(誰だ。女か？　いいや、それならもっと生々しいものが出る。まさか男か？)

自分の鋭い観察眼を今夜ほど悔いたことはなかった。

女なら許せただろう。だが相手が自分と同じ男となれば話は別だ。

ふつつつと腸はらわたが煮えくりかえるような怒りと嫉妬が沸き起こった。

自分でも想像以上に低い声が飛び出した。

「へえ。ならせひ見てみたいな。あんたの希望とやらを」

「ッ！　私の話はいい！　それよりも貴殿の決断を早く聞かせてく——!?」

テーブルに膝を乗せて、ヴォルフラムの唇を強引に奪った。先ほど口に含んでいた酒の甘い香りが舌先を通して伝わる。

動いた衝動でテーブルに置かれた短剣が床に落ちた。

「——っ、貴様、何を……!!　……う、んん……ッ」

欲望のままに胸を手のひらで搾り取るように掴んだ。
ずいぶんと柔らかい。

本物の女の胸とさして変わりがない弾力さだ。

(スライム生地でも仕込んでるのか……?)

胸を掴む感覚が素肌に伝わるのか、ヴォルフラムが身をよじる。

その動きを利用してソファに押し倒した。

「私は……男だぞ……ッ」

「その格好で言われると、逆に興奮するな」

こんな経験は初めてなのだろう。

ヴォルフラムの瞳に恐怖が宿る。

「おっ。皇太子殿下はこういう事に疎うとくていらっしやる」

足の太ももで股間をすりすりと呼してやると、柳のように細い腰が小刻みに揺れ

る。

(やべ、本物の処女だ)

興奮が止まらない。

「わ、たしは……貴殿の決断を……ッ……」

「決断？ あー、決断ね。俺に殺してほしいってことは自分の命をなげうったってことだろ？ んむっ♡ ちゅ♡ なら俺のどうしようと勝手だろう」

「だからと言って……こんな……！ ッ、貴殿に国を背負って立つ誇りは……無いのか！」

「他人の目があるところなら考えたが、なにぶん今この部屋には俺とあんたしかないしなあ。それなら俺があんたの命を買って決断も成り立つだろう」

ヴォルフラムの碧眼に困惑と衝撃が走った。

曲がりなりにも今まで帝国の皇族として敬われ続けてきた人物だ。

自分が買われる立場になるなど驚愕ものだろう。

「さて。ドレスをすぐ脱がすつてのも興がない。それにその可愛らしいお声でどんな風に泣いてくれるか、まずはじっくり楽しませてもらわないとな」

変声魔術をかけられた喉元をつん、と指さした。

彼本来の声を楽しむのはそれからだ。

「それじゃあひとまず、一戦目はじめようか」

ヴォルフラムの身体に馬乗りになったままズボンのベルトをゆるめた。ちやうど彼の胸に乗せるようにムスコを取り出す。

この数日、就任式の準備で女は抱いていない。抜く時間もなかったから、睾丸はたんまりと子種がつまっている。

「や……だ。……やめ、ろ」

怯えるヴォルフラムの顔に興奮は否が応でも高まり、取り出したムスコは完全に勃起していた。

使い込んだ竿はそそりたち、へそにくつつきそうな程だった。先っぽからはふう

ん、と独特の匂いが立ち込め透明な液体があふれ出ようとする。

ぷっくりとふくらんだ亀頭を紺色の美しいドレスの谷間にくつつける。

「お。染み出てる」

胸元の生地があつという間に色の濃いシミをつくり、生地を濡らしていく。

「同じモノぶら下げてるんだから怖がることないだろ？ あ、それとも皇太子殿下のおちんちんは子供サイズなのかな」

「だ、まれ……この、下衆が……っ」

「あれあれ？ さっきまで俺のこと貴殿って呼んでくれたのに、この程度で格下げかあ。いや〜残念だなあ」

「あ、それは………ッ、ホールでまともなことを言っていた、からで……、……ひっ！」

ぬちぬち♡ぬちちっ♡

胸の谷間で腰を振り竿をスライドさせる。

首府の女たちには馬並みと呼ばれた逸物だ。今もヴォルフラムの胸に収まりきらず、はみでた先っぽは彼の唇に今にもくっつきそうだ。

「ほら、俺の演説に聞き入ってたなら、俺のチンコにチュツチュして」

「だ、れが……ッ。そのような、破廉恥なまね……ッ」

必死に身をよじり、顔をそむける態度にゾクゾクする。

「そういう反抗的な態度、良くないなあ」

乳房を脇から持ち上げるように竿を挟ませる。少し指を伸ばせば、背中ががら空きのデザインだから素肌にさわれる。

指の腹で脇をこねると、くすぐったそうに身じろいだ。

(うわすげー敏感)

思わぬ反応にどんどん歯止めがきかなくなってくる。

嫌そうに顔をそむける横顔が次にどんな反応を見せるか楽しみで堪らない。

そのまま腰を押し進めた。

に、ちゅう♡♡

あの可憐な唇に使い込まれた亀頭がくつつく。中央の尿道をきつく閉じられた口元に押し付ける。

そのまま尿道からあふれでる先走り、紅を引くように唇へ塗りつけた。

「うわ。俺のちんちん汁、皇太子殿下のお口に塗っちゃった。お味はどうかかな？」
すると唾を吐きかけられた。

「今に天罰を降されるがいい。この穢けがらわしい侵略者め……！」

「お。そういうこと言っちゃう？ それじゃあ教えてやらないとなあ。俺に買われたらどうなるかってこと♡」

むんずと偽の乳房をつかみ、竿を谷間の底に押し付ける。そこだけは彼本来の素肌だろう。そのまま偽物の胸を何度も揉みしだき、竿を包ませてはくねらせる。

「本物の女の口になっちゃいそうだよな。ほら、俺の玉があんたのおっぱいにぶつ

かってるの見える？　ここから精子が生まれて、尿道を伝って、赤ちゃんができる部屋にぶちまけられるの。分かる？　今日はヴォルフが男に抱かれる初めての夜だから、いっぱいサービスしてやらねえと、な！」

ぶびゆるるるる♡♡

白くにごった液体が勢いよく噴き出し、ヴォルフの美しい顔を汚した。白磁のような頬、けふる銀髪、整った鼻頭、それにあの可憐な唇。

ヴォルフの顔を余すことなく穢し、残った精液を鎖骨に塗りつけてやった。熱を持った竿を頬にくっつけ、銀髪をひとふさ持ち上げた。

「っ……あつ……い……」

「ちゃんと出したら拭き取らないと」

にちやり♡♡

竿や亀頭に容赦なく銀髪をくっつけて、手で扱しきとる。

「い、や……だ……ア。やめ……ろ」

か細い声を見無視して、そのまま何度も銀髪をからめてやった。ようやく終わると美しかった銀髪は見る影もないほど汚されていた。

「じゃあ本番と一緒に楽しもうな。ヴォルフ」

名前を囁くと、きつく睨まれた。

本人はその視線がどれほどこちらを昂らせるか、まるで分かっていない。

その純粹ぶりを噛み締めるようにリチャードは笑った。